

平成19年度名古屋大学地震防災訓練を実施



IB 電子情報館で行われた防災講演の様子

地震防災訓練が、10月10日(水)、東山地区、鶴舞地区、大幸地区、豊川地区、留学生会館及び国際唵鳴館において、実施されました。

この訓練は、本学構成員の防災意識の高揚を図るとともに、マニュアルなどに定められた災害発生時の基本的な対応手順を確認し、対応能力を向上させることを目的として、平成15年度から実施しているものです。今年度の訓練では、勤務（講義）時間中に、名古屋市内で震度6弱の揺れとなる地震が発生したという想定で、情報伝達、安否確認、避難、部局独自の訓練等が行われました。

当日は、午前10時37分に地震が発生したという想定で訓練がはじまり、直ちに平野総長から災害対策統括本部設置の指示が出されました。訓練開始の情報は、電話、FAX及び東山キャンパス内に設置した屋外防災無線装置（日本語・英語）で伝えられ、建物によっては館内放送も利用されました。訓練終了後は、IB 電子情報館において、飛田災害対策室員による防災講演会や起震車による模擬地震体験が行われ、多数の教職員、学生が参加しました。

今回の訓練では、学生及び教職員の安否確認について、新しいシステムを使った訓練も実施されました。情報連携統括本部と災害対策室が開発を進めたシステムで、「名大

ポータル」の一部を使い、自分の安否情報を携帯電話から登録できるようにしたものです。昨年からの試行を経て、今回は全部局を対象に、システム側から登録を呼びかける「発信型」の安否登録訓練を行い、多数の安否情報が登録されました。また、名古屋市消防局の協力のもと、普通救命講習Ⅰ（成人コース・3時間）の出張講習が、東山地区において実施されました。150人の定員に対し、昨年同様、申込みが殺到し、定員オーバーで受講できなかった人も多数でため、来年度以降も継続して実施する予定です。

今年度は、各部局独自の防災訓練も多数実施され、避難訓練、消火訓練をはじめ、エレベーター閉じこめを想定した訓練や、脱出袋による降下体験訓練なども行われ、参加者は真剣な面持ちで訓練に望んでいました。さらに、災害対策室で作成した「地震時の対応ガイド」（4パターン）をもとに、各部屋のマニュアルを作成したり、地震防災についての啓発教育を行う部局もありました。

東海地域においては、東海地震・南海地震などの巨大地震による大規模な地震被害の発生が危惧されています。今後も、大学組織としての対応能力向上のために定期的な防災訓練を続けていく予定です。



起震車による地震体験の様子



災害対策統括本部の移動訓練



消火訓練の様子

第13回博物館企画展の初日に講演会を開催

●博物館

博物館は、10月2日(火)～13日(土)、諏訪兼位本学名誉教授によるアフリカのスケッチを中心にした企画展「諏訪兼位 アフリカの旅－スケッチと短歌－」を開催しました。諏訪名誉教授は、1962年以來、アフリカ大陸を研究のフィールドとし、エジプトから南アフリカに至る10ヶ国以上において地質学の調査・研究を行い、調査の合間に、アフリカの大地や人の印象をスケッチブックに記録し、その時々を思いを短歌にしました。この企画展は約40枚のスケッチと12首の短歌、そして短歌に登場するアフリカの石を組み合わせたユニークなクロスカルチャー展示となりました。



講演をする諏訪名誉教授



ギャラリートークをする諏訪名誉教授

初日の10月2日(火)には、諏訪名誉教授が「科学を短歌によむ」という講演を行いました。講演は短歌に興味を持つきっかけとなった若山牧水の話から始まり、続いて短歌を日記代わりに詠んで投稿する作歌のすすめ、そして短歌に詠まれたアフリカの自然・風景・人が多くのスライドを使って解説されました。臨場感あふれる講演によって、約60名の聴衆は皆アフリカを訪れた気分になっているようでした。講演に関連して、樋口敬二本学名誉教授から、科学研究の要点を俳句にする「俳句アブストラクト」という提案を雪氷学会で行った話が披露され、聴衆は、物事の本質を短い文字数で表現することの重要さと、その道のプロとプロでない人では、同じ景色や現象を見ても違った俳句や短歌になることの意味を考えていました。

同日の最後には、企画展の会場に移動し、諏訪名誉教授が展示中のスケッチと短歌のすべてについて詳しい解説をギャラリートークとして行い、熱心な聴衆は芸術の秋を満喫していました。

第32回、第33回防災アカデミーを開催

●災害対策室

災害対策室は、9月12日(水)、第32回防災アカデミーを、環境総合館レクチャーホールにおいて開催しました。今回は、小泉尚嗣博士(独立行政法人産業技術総合研究所地震地下水研究グループ長)による「地下水で東南海・南海地震を予測する」と題した講演が行われました。

過去の地下水の記録を調べると、大地震の前後で水位が大きく変化した例が存在します。中には、地震の発生に先駆けて変化したと考えられる例も知られています。今回の講演では、そういった実際の観測事例とその発生メカニズムをわかりやすく解説するとともに、次の東南海・南海地

震に向けて、今、どんな観測が準備されているのかが紹介されました。

続いて、10月15日(月)に、第33回防災アカデミーが開催され、川口 淳 三重大学准教授による「地域の防災力向上のために～地域圏大学 三重大の挑戦～」と題する講演が行われました。

川口准教授は地域住民や企業関係者との共同研究を通じて地域防災力の向上に取り組んでいます。講演では高齢化が進む漁村における災害時用援護者避難対策についての事例や、観光客も含めた海岸利用者の津波避難対策に関する事例について、多くの写真に基づいてその様子が紹介されました。防災アカデミーには地域の防災リーダーが多数出席しており、「今回の講演から活動発展のヒントが得られた」という感想が聞かれました。



講演する小泉尚嗣博士



聴衆で埋め尽くされた会場と講師の川口三重大准教授